第２節　上町遺跡における遺構の分布と変遷

1　上町遺跡の遺構総数

本報告書では、2023 年度までに調査を実施してきた全調査を報告した。これにより、68 次にわたり延べ 21,615 ㎡を調査してきたことが明らかとなった。調査した遺構の総数は、竪穴建物跡 177 棟、竪穴状遺構 29 基、掘立柱建物跡 52 棟、土坑 125 基、集石遺構 86 基、溝 45 条、配石遺構 28 基、土壙墓 3 基、道路 3 本、火葬墓 1 基、石敷き遺構 1 基、盛り土遺構 1 基である（第 47 表）。なお、この数には柱穴やピットなどの小遺構を除き、また方形周溝墓の可能性がある遺構 2 基を溝に含めている。

このように大規模に調査を実施しているものの、第 1 節で示した遺跡範囲の通り、遺跡の大半が未調査部分である。このことを前提に、本節では本発掘調査で暦年代が明らかとなった竪穴建物跡と掘立柱建物跡を主な対象とし、上町遺跡の変遷を考えたい。また、各時期の遺構からみた集落の構造にも可能な限り触れたい。

対象は、本発掘調査によって遺構の暦年代が検討された第 1 ～ 7・10・26・27・30・33・37・45・49・50 次調査とする。そうすると対象遺構数は、竪穴建物跡 159 軒、竪穴状遺構 29 基、掘立柱建物跡 52 棟、土坑 51 基、集石遺構 68 基、溝 30 条、配石遺構 31 基、土壙墓 3 基、道路 3 本、火葬墓 3 基、石敷き遺構 1 基、盛り土遺構 1 基となる。このうち、暦年代が明らかになっている竪穴建物跡は 121 軒、掘立柱建物跡は 17 棟である（第 48 表）。

2　上町遺跡の構造及び遺構と遺物の変遷に関わる研究史

上町遺跡においては、7 冊にわたる報告書で遺跡の評価を検討してきた蓄積がある。ここでは、遺構と遺物からその内容を見ていく。

上町遺跡の古代の集落構造　上町遺跡の報告書で、集落構成について触れたのは『上町遺跡 D 地点発掘調査報告書』である（河合英夫 1991）。また、『上町遺跡トヨタ地点・0 地点・栗原センター地点発掘調査報告書』では、7 世紀末から 8 世紀初頭と推定した掘立柱建物跡群が、礎石を持ち、大型建物であり、建物配置が計画的であることから、「官衙の存在」に初めて言及している（河合英夫 1994）。

次の段階として『上町遺跡金子・氷見地点発掘調査報告書』などでは、合計 11 棟となった掘立柱建物跡群を総体として捉えて特徴を述べ、「荒城評の官衙施設」として成立した可能性にも触れ、荒城郡衙の関連施設と指摘した（河合英夫 2001・2015）。また、同時期にはこれらの建物跡群から北西 400 ｍの地点で古町廃寺跡が成立していたと考えられた（河合英夫 2013・三好清超 2019）。さらに、南東 750 ｍの地点で上町廃寺跡が成立していたことも述べられた（飛驒市教育委員会 2019・三好清超 2019）。

遺物の暦年代　遺物については、『上町遺跡 C 地点発掘調査報告書』で竪穴建物跡出土遺物による須恵器・土師器の編年と年代観を示している（河合英夫 1989）。陶邑編年や猿投編年、美濃須衛編年などの編年観を参照にしつつ、8 時期に分類し、Ⅰ期を TK10 型式期、Ⅱ～Ⅲ期を TK43 型式期～ TK209 型式期、Ⅳ期を TK217 型式期～ TK46 型式期、Ⅴ期を I-17 ～ I-41 号窯式期前半･須衛第 9 号窯式段階、Ⅵ期を I-41 号窯式期・平城Ⅰ式期、Ⅶ期を C-2 号窯式期・老洞 1・2 号窯式期、Ⅷ期を I-25 号窯式期に比定した。また、『上町遺跡向町地点』では、猿投窯跡資料の研究が進んだことを受け、TK43 型式は 6 世紀後半、TK209 型式は 7 世紀前後、杯 G の出現消滅は 7 世紀後半から末、杯 A やボタン状摘

第47表　上町遺跡調査遺構数一覧表（令和4年度末現在）

調査次数	調査種別	竪穴建物跡	竪穴状遺構	掘立柱建物	土坑	集石遺構	溝	配石遺構	土壙墓	道路	火葬墓	石敷き遺構	盛り土遺構	掘り込み地業
1	本調査	23	1	2	5	3	1	0	0	0	0	0	0	0
2	本調査	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	本調査	44	19	27	17	8	9	19	3	2	0	1	0	0
4	本調査	11	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	本調査	27	1	1	4	49	3	8	0	0	0	0	0	0
6	本調査	1	3	8	0	5	0	0	0	1	0	0	0	0
7	本調査	10	0	4	3	0	7	1	0	0	1	0	0	0
8 Ⅰ	試掘調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
8 Ⅱ	試掘調査	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8 Ⅲ	試掘調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9 Ⅰ	試掘調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
9 Ⅱ	試掘調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9 Ⅲ	試掘確認調査	3	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	本調査	5	1	3	9	1	5	0	0	0	0	0	1	0
10 Ⅱ	試掘確認調査	4	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0
11	試掘調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	試掘調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22	試掘確認調査	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
23	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
24	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
25 Ⅰ	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
25 Ⅱ	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
25 Ⅲ	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
26	本調査	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
27	本調査	4	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
28	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
29	工事立会	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
29 Ⅱ	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
30	本調査	4	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
31	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
32	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
33	本調査	3	0	1	3	0	5	0	0	0	0	0	0	0
34	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
35	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
36	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
37	本調査	9	0	1	23	0	3	0	0	0	0	0	0	0
38	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
39	立会・試掘確認調査	5	0	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1
40	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
41	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
42	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
43	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
44	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
45	本調査	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
45 Ⅱ	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
46	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
47	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
48	試掘確認調査	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
49	本調査	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
50	本調査	5	4	2	37	17	4	0	0	0	0	0	0	0
51	試掘確認調査	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
52	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
53	試掘確認調査	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
54	試掘確認調査	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
55	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
56	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
57	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
58	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
59	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
60	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
61	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
62	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
63	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
64	試掘確認調査	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
65	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
66	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
67	工事立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
68	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
遺跡外1	試掘確認調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	177	29	52	125	86	45	28	3	3	1	1	1	1

第 48 表　時期別の遺構集計表

時期	1 期	2 期			3 期		4 期		5 期		6 期	7 期	合計
暦年代	3c後半～4c初	6c中～後葉	7c前～中葉	7c後葉	7c末～8c前葉	8c中葉	8c後葉	9c前半	9c後半～10c前葉	10c中葉	11c後半～12c中葉	15c末～17c初	
竪穴建物跡数	2	30	13	3	31	20	6	2	5	4	5	0	121
掘立柱建物跡数	0	1	2	0	11	0	2	0	0	0	1	0	17
周溝墓等	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
大規模な溝	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	1	0	5
道路	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2

み蓋の出現する I-41 号窯式期は 8 世紀前後、杯 A・杯 B の器種分化が進む I-25 号窯式期は 8 世紀第 2 四半期、椀 A の盛行する NN-32 号窯式期は 8 世紀後半、灰釉陶器が出現する K-14 号窯式期は 9 世紀前半、K-90 号窯式期は 9 世紀後半から 10 世紀第 1 四半期、O-53 号窯式期は 10 世紀中葉、H-72 号窯式期は 10 世紀後半、百大寺式は 11 世紀前半、山茶碗の出現は 11 世紀後半～ 12 世紀前半に当てた（河合英夫 2013）。

それを踏まえ、弥生時代から古墳時代にかけてのⅠ期から 13 世紀のⅩⅢ期までを片山博道は設定した（片山博道 2016）。Ⅰ期は弥生時代後期から古墳時代、Ⅱ期は須恵器杯 H を主体とする 6 世紀中葉から後葉、Ⅲ期を杯 H 蓋の天井部と口縁部の境に凹線が入るものと入らないものがある 7 世紀前葉から中葉、Ⅳ期を杯 G が主体となる 7 世紀中葉から後葉、Ⅴ期を杯 A・杯 B の体部傾きが大きく器高が低い 8 世紀前半、Ⅵ期を杯 A・杯 B の傾きが小さくなる 8 世紀後半、Ⅶ期を灰釉陶器が入る 9 世紀前半、Ⅷ期を灰釉陶器の高台が三日月状を呈する 9 世紀後半、Ⅸ期が灰釉陶器の高台の稜が無くなる 10 世紀前半、Ⅹ期を 10 世紀後葉、ⅩⅠ期を 11 世紀前葉から中葉、ⅩⅡ期を 11 世紀後葉から 12 世紀前半、ⅩⅢ期を 12 世紀後半から 13 世紀後半と設定した。

上町遺跡の消長　遺跡の消長については、『上町遺跡向町地点』で述べられ、6 回の画期について明らかにされている（河合英夫 2013）。これ以降の報告書の遺構の消長は、河合の画期設定に沿って検討している（三好清超 2016）。

第 1 の画期は、弥生時代から古墳時代にかけての転換期である。第 2 の画期は 6 世紀中葉から後半にかけてであり、竪穴建物跡群が点在している時期である。7 世紀中葉まで継続すると考えられる。第 3 の画期は 7 世紀末から 8 世紀初頭であり、前述したとおり、複数の建物の計画的な配置と古代寺院の建立があった。第 4 の画期は 8 世紀後半であり、集落規模の縮小と遺構数の減少を認めることができる。第 5 の画期は 9 世紀後半から末、また 10 世紀前半から中葉にかけて認められる。10 世紀後半には途絶えるが、徐々に衰退するのではなく急激に途絶するため、集落構造の転換を示している可能性がある。第 6 の画期は 11 世紀後半ごろに認めることができる。拠点的な集落を形成したと考えられるが、短期型で途絶する。

3　上町遺跡の変遷

以上のように、これまでの研究では遺物の詳細な検討から各遺構の時期が示され、特に大型掘立柱建物群が郡衙関連施設という重要な指摘がなされてきた。一方、集落遺跡としての各時期の構造やまとまりを示すことができていないという課題が残されている。このため、時期が判明している竪穴建物跡 121 軒、掘立柱建物跡 17 棟の分布と変遷について示す。遺跡の時期区分は、同節 2 の先行研究を踏まえ、暦年代に若干の修正を加えつつ、ここでも 6 回の画期を主として設定したい。また、15 世紀以降の遺物が認められるため、中世にも 1 時期設定し、大きく 7 時期に分けて変遷を示す。なお、

「SI01」などのように、各次数の種別と検出番号が重複しているため、調査次数を冒頭に付し、「50SI01」などのように記す。

上町遺跡1期　3世紀後半から4世紀初頭までである（第148図）。

第1の画期は弥生時代末から古墳時代初頭にあたる。宮川と荒城川に挟まれた当地が現在の河道に落ち着いて、上町遺跡周辺が離水し、人々の生活痕跡が認められ始めた時期である。

竪穴建物跡は、遺跡の北東辺りで弥生時代末の月影式が出土する05SI09、古墳時代初頭と考えられる03SI06を確認した。05SI09は上町遺跡で現在のところ最も古い遺構である。竪穴建物跡はこの2軒の確認のみであり、集落としての在り方は不明である。また、遺跡の中央において、古墳時代初頭の赤彩土器を伴う方形周溝墓03SZ01、33SD05、古墳時代初頭の土師器甕の埋納遺構を伴い墳墓の可能性がある土盛り遺構10SM01の3基を確認した。

これらより、遺跡地の北西部に集落、中央に墓域が展開されていた可能性を想定することができる。終期は古墳時代初頭であり、ここで一旦断絶するため、短期的な集落であったと考えられる。

上町遺跡2期　6世紀中葉から7世紀後葉までである（第149図）。

第2の画期は6世紀中葉から後葉である。竪穴建物跡が30軒・掘立柱建物跡2棟を確認し、遺構・遺物ともに急激に増加する。第33次調査では、1期に属する33SD05を切って竪穴建物跡33SI06が構築される。土地利用の在り方が大きく変わり、集落域を開拓した様子がみてとれる。また、7世紀前半では竪穴建物跡13軒と掘立柱建物跡2棟、7世紀中葉から後葉では竪穴建物跡3軒が認められる。徐々に遺構数が減少し、終期は7世紀後葉と考えられる。

西から順に第5・3・1・26・27・4次調査にわたり、8つの地点で2軒以上の竪穴建物跡を近接して確認した。これは集落の単位を示すグループと考えられ、①～⑧とする。最も遺構数が多いのはグループ⑤であり、竪穴建物跡9軒と側柱の掘立柱建物跡1棟を数える。次に多いのは竪穴建物跡7軒と側柱の掘立柱建物跡1棟のグループ③である。最も古い掘立柱建物跡はグループ③に属する6世紀中葉から後葉の06SB02である。最大規模の竪穴建物跡は、グループ⑤に属する01SI06である。このことから、集落の中心的な役割が、当初グループ③であり、7世紀頃にグループ⑤へ移動したものと考えられる。

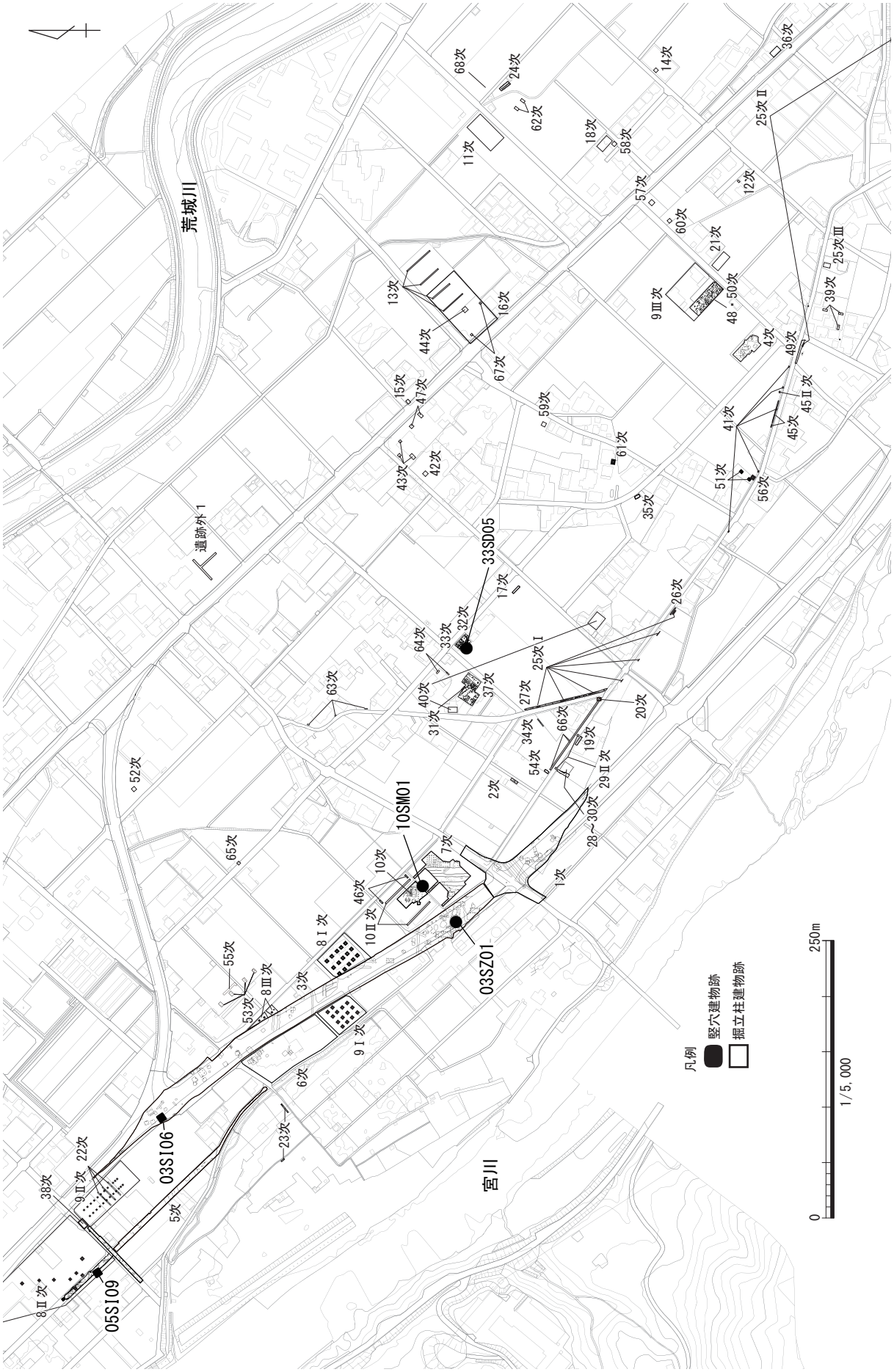
なお、第1・5・26次調査では、当該時期の竪穴建物跡を重複する状況で検出している。建て替えによるものと考えられ、居住域は固定されていたものと想定される。

上町遺跡3期　7世紀後葉から8世紀中葉までである（第150図）。

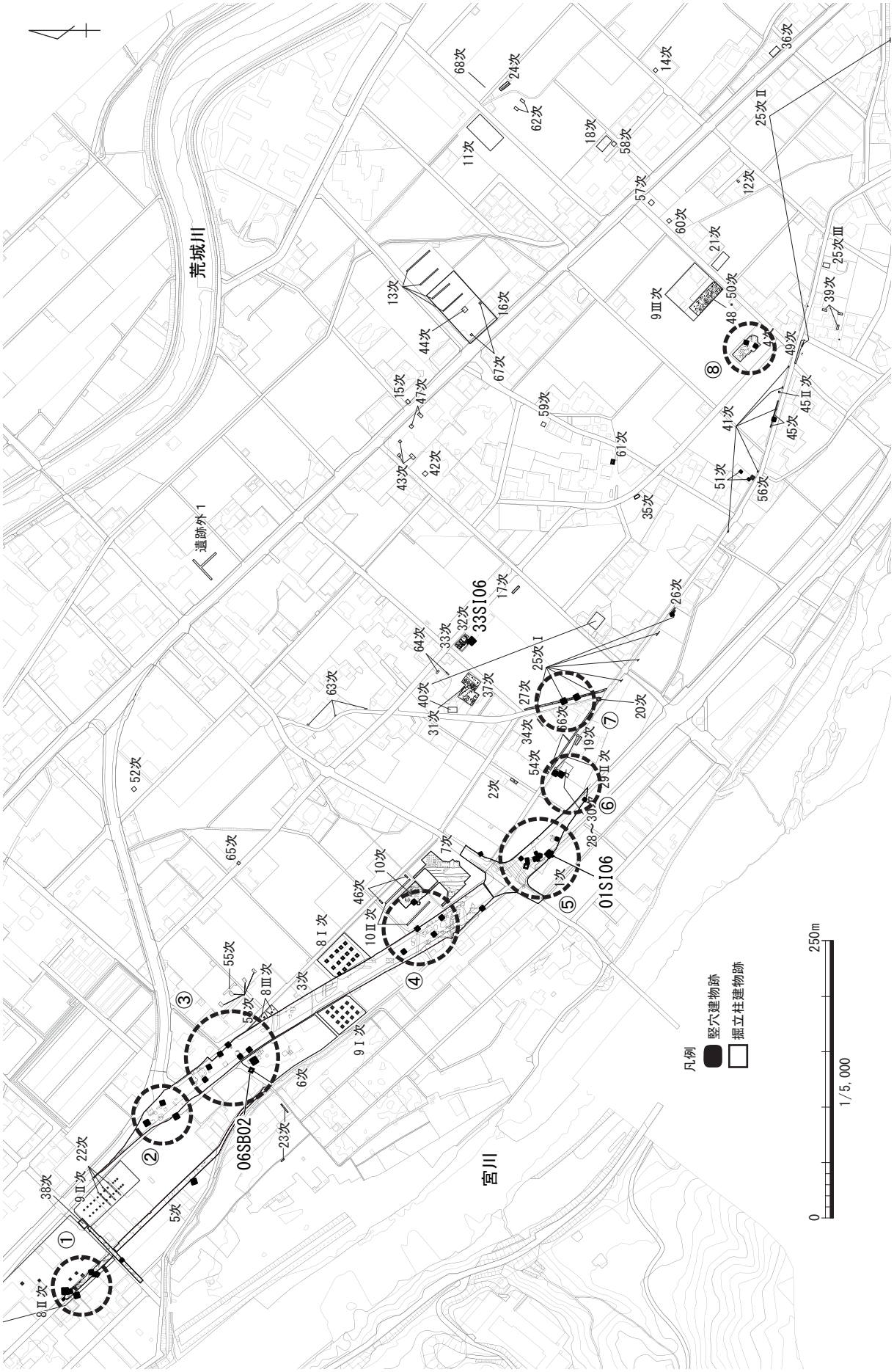
第3の画期は7世紀末葉から8世紀初頭に認められる。竪穴建物跡31軒・掘立柱建物跡11棟を確認し、2期の終期と比べて遺構数が飛躍的に増加する。8世紀前葉から中葉では、竪穴建物跡20軒を確認でき、新たな掘立柱建物跡は認められない。継続して建っていたものと推測されるが、それ以降も新たに建築した痕跡が認められないため、終期は8世紀中葉と考えられる。

3期では、第1・7・10次調査で検出した遺跡の中央に位置する大型の掘立柱建物跡群が特筆される。その特徴は、方位を正方位に揃えること、建物間の柱筋を揃えること、建物や区画施設の距離も完数尺で揃えることなどであり、溝も伴う。高い計画性をもって配置したものと考えられ、飛騨国荒木郡衙に関わる中枢施設であった可能性が想定される。最も大きいものは桁行7間×梁行2間の03SB07である。地方官衙の政庁脇殿を彷彿とさせる。

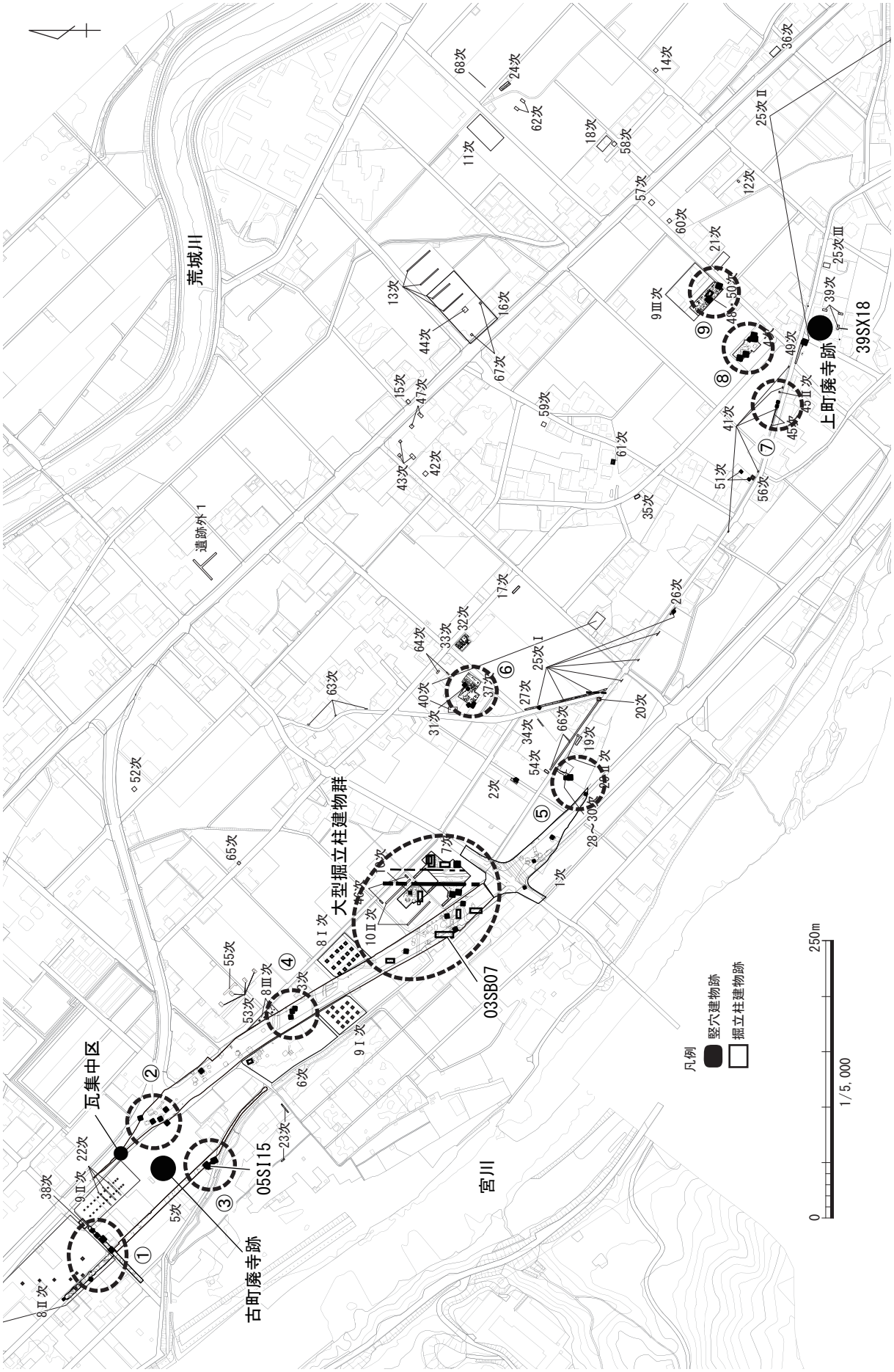
また当該時期には、第3次調査の瓦集中区・第5次調査の完形の軒丸瓦が出土する05SI15から、



第 148 図　上町遺跡１期遺構図



第149図　上町遺跡2期遺構図



第 150 図　上町遺跡 3 期遺構図

古町廃寺跡の成立を想定している。さらに第39次調査地点で基壇状の遺構39SX18を検出し、上町廃寺跡の成立を想定している。郡衙中枢域に隣接して2つの古代寺院が建立されたものと考えられる。なお、高山市国府町境の荒城川近くで瓦片が採集され、塔ノ腰廃寺跡の存在も想定されている。その場合、近隣に3つの古代寺院が存在したことになる。

集落の単位としては、西から順に第5・3・7・10・29・37・45・4・50次調査で2軒以上の竪穴建物跡を近接して確認した。大型掘立柱建物跡近くのものを除き、グループ①～⑨とした。竪穴建物跡の遺構数では、グループ①・②・⑥・⑧で認められる5軒が最も多い。また掘立柱建物跡が伴うのは⑨のみである。このことからは、郡衙や寺院周辺に集住する集落の単位には、同規模のものが多かった状況であったと考えられる。

なお、第5・3・37・45・4・50次調査では、当該時期の竪穴建物跡を重複する状況で検出している。このため、居住域は固定されており、建て替えを行いながら集落を営んだと想定される。

上町遺跡4期　8世紀後葉から9世紀前半までである（第151図）。

第4の画期は、8世紀後葉である。竪穴建物跡6軒、掘立柱建物跡2棟を確認している。3期の終期と比べ、遺構数は激減する。郡衙に関連すると考えられた大型掘立柱建物跡も存続しない。この後も9世紀前半の竪穴建物跡2軒の確認に留まり、集落衰退が継続する様子をうかがうことができる。このため、4期の終期は9世紀前半と考えられる。

4期で2軒以上の竪穴建物跡を確認できるのは第37・45・50次調査であり、グループ①～③とした。グループ①は3期⑥、グループ②は3期⑦、グループ③は3期⑨の位置と重複する一方、大型掘立柱建物跡をはじめ、3期の他のグループ①～⑤・⑧の6グループは4期に継続していない。このため、郡衙関連建物の廃絶と共に、集落グループの多くが途絶したものと考えられる。

また、古町廃寺跡周辺では、第3・5次調査で建物等の遺構を確認していない。このため、古町廃寺跡は3期で廃絶した可能性が想定される。一方、第39次調査では8世紀後葉から9世紀後半の遺物が出土している。ここからは、上町廃寺跡は4期も存続していたものと考えられる。

上町遺跡5期　9世紀後半から10世紀後半までである（第152図）。

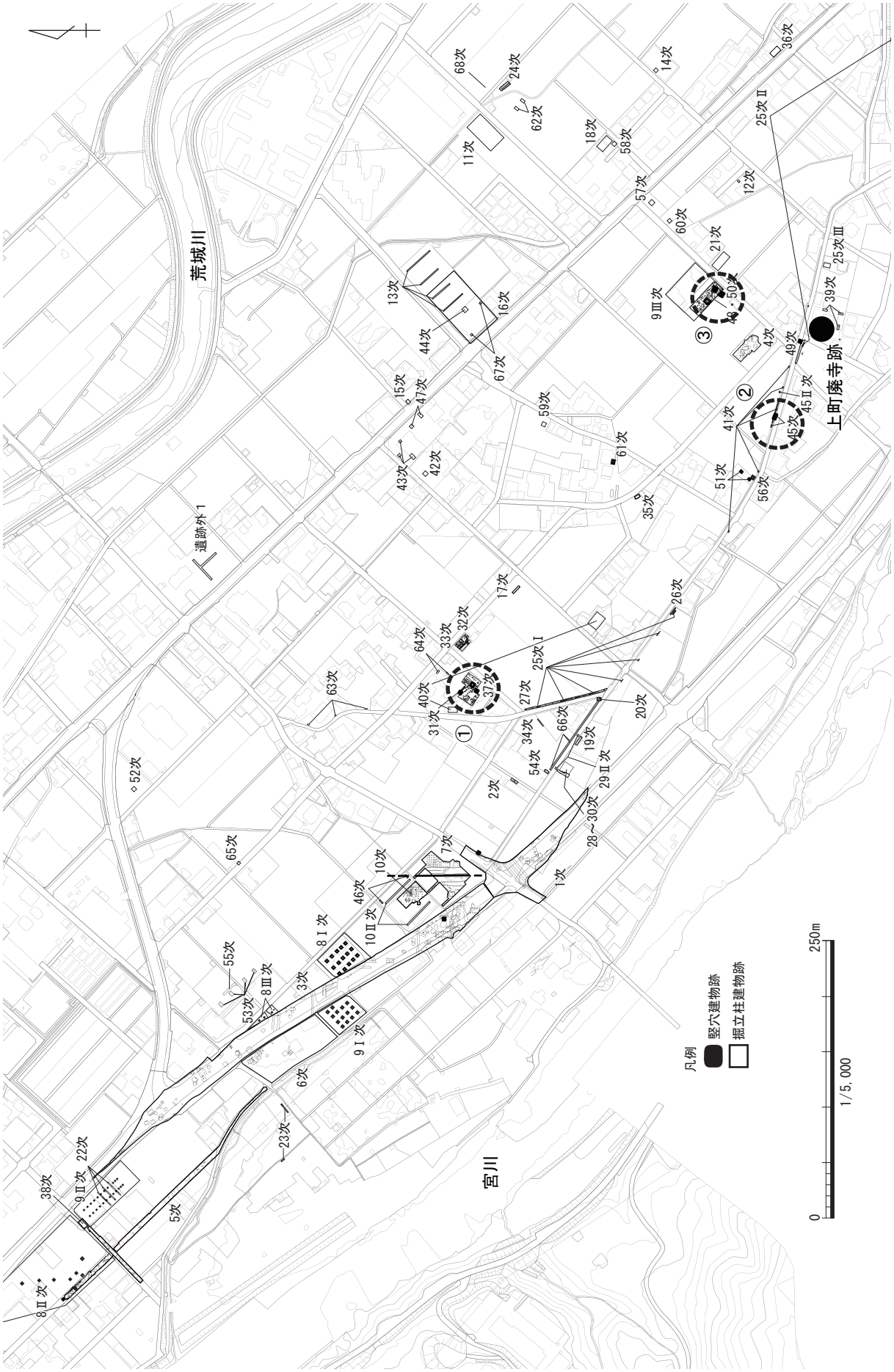
9世紀後半には第5次調査で5軒の竪穴建物跡を確認し、集落グループが再び見られるようになる。また、10世紀中葉の竪穴建物跡も4軒確認できる。しかし、10世紀後葉の遺構を確認できず、この頃に集落は一旦途絶えたと考えられるため、5期の終期は10世紀中葉と考えられる。

5期で2軒以上の竪穴建物跡が見られるのは、第5次調査地点のグループ①3軒と第37次調査地点のグループ②2軒である。グループ②は4期①と同地点であるが、いずれの竪穴建物跡も10世紀中葉のものであり、4期の終期から半世紀以上の隔たりがある。このため、グループ①②とも、4期のグループを踏襲していない可能性が高い。

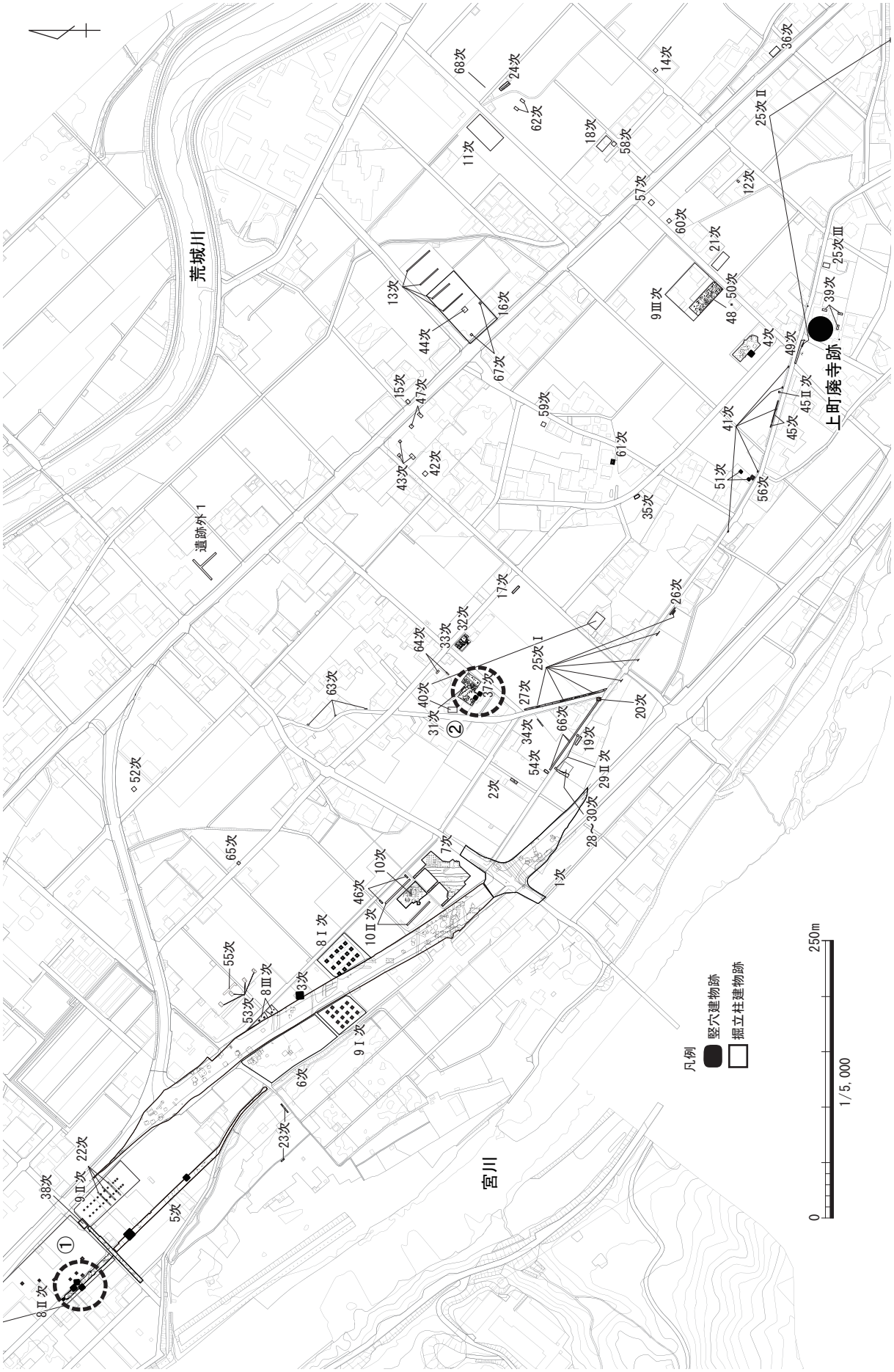
また、第39次調査では9世紀後半の遺物も出土する。このため、上町廃寺跡は5期まで存続し、ここで廃絶したものと考えられる。

上町遺跡6期　11世紀後葉から12世紀中葉までである（第153図）。

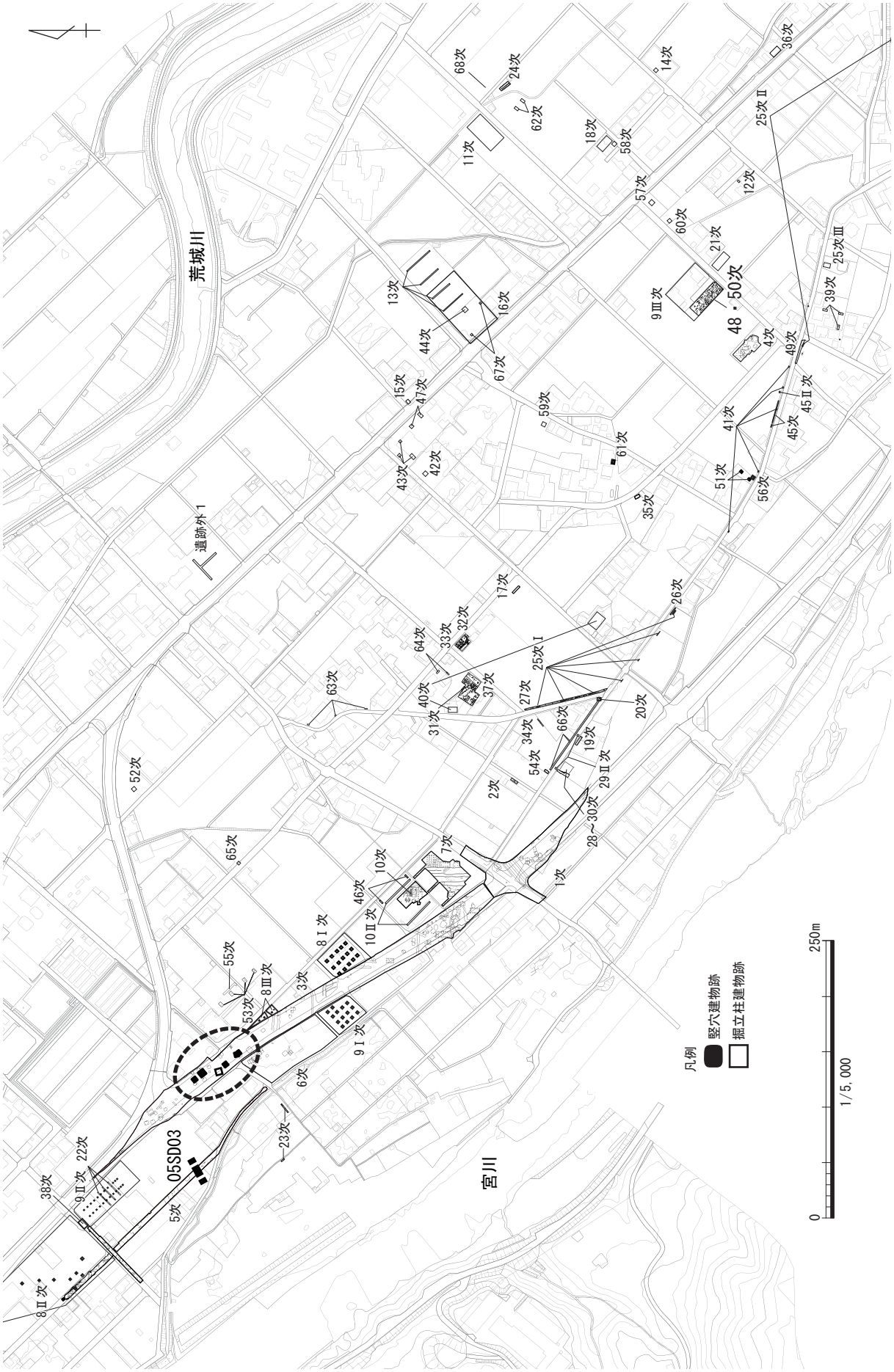
11世紀後葉以降の竪穴建物跡4軒と掘立柱建物跡1棟を第3次調査で確認している。第5次調査では大規模な溝05SD03を確認した。第50次調査では、この時期の貿易陶磁や山茶碗が出土し、炭化物の年代測定でも該当し、土坑や溝などを確認したものの、建物遺構を検出できていない。多く確認した柱穴はこの時期の掘立柱建物跡を構成するものと想定され、この頃から徐々に竪穴建物跡から掘



第 151 図　上町遺跡 4 期遺構図



第152図　上町遺跡5期遺構図



第 153 図　上町遺跡 6 期遺構図

立柱建物跡へと移行していったものと考えられる。

また、12 世紀後葉以降の遺構・遺物は確認できなくなる。このため、6 期は 11 世紀後葉から 12 世紀中葉までと考えられる。

上町遺跡 7 期　15 世紀から 17 世紀初頭までである（第 154 図）。

この時期の遺構としては、第 3 次調査で検出した 2 条の道路遺構が該当する。その他、明確な遺構を確認できていないが、第 50 次調査で当該時期の古瀬戸後期の瀬戸美濃焼や土師器皿 5 類が散見される。このため、調査で確認された柱穴は当該期のものもあり、掘立柱建物跡で構成された集落であったと想定される。

7 期は、上町遺跡から宮川対岸に位置する古川城跡との関連が想定される。古川城跡は姉小路氏城館跡の一つであり、発掘調査で 15 世紀末から 16 世紀前葉に築城され、16 世紀中葉から後葉頃と、16 世紀末葉から 17 世紀初頭頃に改修されたと考えられた。それに関連した文献史料調査・歴史地理調査では、第 52 次・65 次調査付近より西側で 15 ～ 16 世紀に荘園の存在を想定した。また、第 5 次調査付近・第 63 次付近・第 59・61 次調査付近で集落の存在を想定し、第 5 次調査付近の集落は近世初頭の増島城跡建設に伴って移転した可能性を想定している（飛騨市教育委員会 2022）。このため、小規模な集落は現代まで存続するものの、終期は 17 世紀初頭と考えられた。

4　遺跡の様相

これまで、調査範囲に制約があることを前提に上町遺跡の消長から時期を設定し、各期の集落構造と変遷について述べてきた（第 49 表）。

集落は 1 期の弥生時代末頃から見られ、集落域と墓域が分かれる可能性があった。集落として本格的に成立するのは 2 期の 6 世紀中葉以降である。その集落では、拠点となるグループで竪穴建物跡が多く、掘立柱建物跡も伴うものと考えられた。

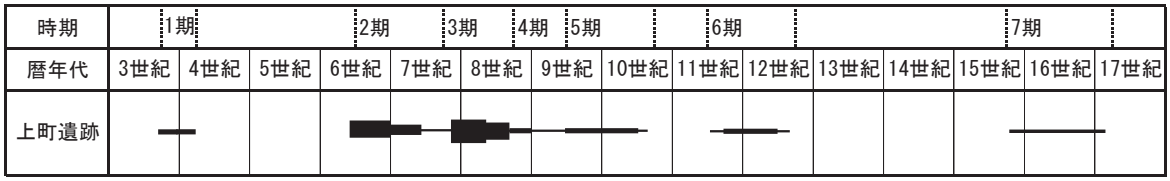
また、3 期の 7 世紀末葉から 8 世紀初頭にかけて、郡衙関連と考えられる大型掘立柱建物跡と、古町廃寺跡・上町廃寺跡の 2 つの古代寺院が出現した。上町遺跡における最も大きい画期である。それに伴う集落単位は、同規模のものが多い様相が明らかとなった。

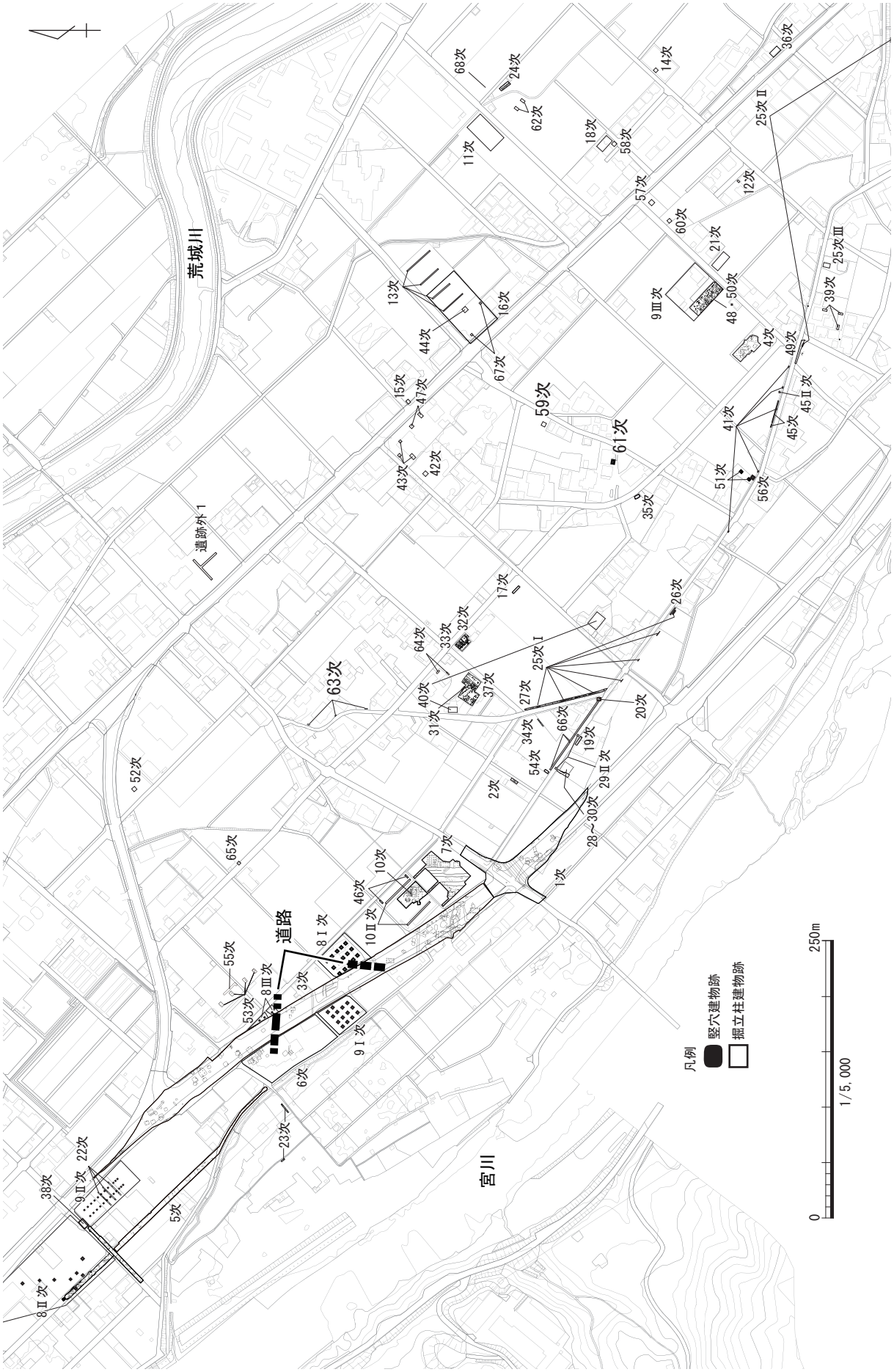
4 期の 8 世紀後葉には大型掘立柱建物跡と古町廃寺跡は衰退する。それに伴って、集落も衰退していく。このことは、律令制の衰退というイメージと重なる。以降、5 期の 9 世紀後半、6 期の 11 世紀後葉、7 期の 15 世紀と遺構・遺物が散見され始める時期はあるが、17 世紀初頭の終期をむかえるまでの全体の様相は明らかにしえなかった。

居住施設としては、竪穴建物跡が 12 世紀前半まで見られた。この頃から掘立柱建物跡へ徐々に移行し、完全移行は上町遺跡では 15 世紀以降と推測された。

以上のように、遺構から見た上町遺跡の変遷について考えてきた。一方、郡衙関連遺構周辺と集落グループごとの土器の提示や墨書土器の分布など、遺物の検討に踏み込むことができなかった。このことは今後の課題として、引き続き検討を進めていきたい。

第 49 表　上町遺跡の消長表





第 154 図　上町遺跡７期遺構図